

「神様の愛のもとに戻りましょう」

マルコによる福音書 7 章 1～5 節

女子聖学院中学校・高等学校チャプレン 高橋 恵一郎

イエス様の時代、ユダヤの社会で重要視されていたことは宗教上の規則を守ることでした。この宗教上の規則を彼らは律法と呼んでいました。律法をどこまでしっかり守るか、そのことが最も大切なことと考えられていました。律法学者と、律法の実践を最重要課題とするファリサイ派、こうした宗教指導者たちは律法を守ることに人生のすべてのエネルギーを費やしていました。しかし、一般の人たちは、普通の生活をしなければなりません。大体の規則を守ることはできますが、細かいことまでは知識もないし、守ることができません。律法学者やファリサイ派の人々はそうした普通の人たちを軽蔑し、「地の民」と呼んでいました。

そうした宗教指導者らが守っていたのは聖書に書かれている律法だけではありませんでした。後から付け加えられた口伝律法というものがあり、無数にありました。それを彼らは、これこそ命と言って守っていたのです。その一方、イエス様はそうした口伝律法に囚われない行動をとっていました。例えば、まさに律法づくめの日である安息日であっても、病気の人が苦しんでいれば、癒してあげたり、弟子たちが、麦の穂をつんで口にいられたりすることも許していました。そうした行為は宗教指導者らが認めていなかったものであったのです。そのため、ユダヤ教の教師ならば、そんなことをしてはいけない、見逃してはいけない、と律法学者やファリサイ派の人々は怒りを燃やしていました。

本日お読みした聖書の箇所にも同じようなことが書かれていました。律法学者やファリサイ派の人々は食事をする時に念入りに手を洗いました。また、そうするように人々に説いていました。それは手が汚いからとか、病気予防のため、というのではなく宗教上の理由でした。その教えに反して、弟子たちは「ああ、お腹がすいた、食べよ、食べよう」と言ってご飯を食べてしまいました。「お前はユダヤの教師であるのに、どうして弟子たちをちゃんと指導しないんだ」「手を洗いなさい」と言わないんだ、と詰め寄っていたのです。律法学者やファリサイ派の人々がどんな顔をしていたのでしょうかね。おそらく、目を釣り上げ、口を尖らせ、威嚇するような表情であったのだと思います。

そんな彼らにイエス様は言われました。「あなたたちは自分の言い伝えを大事にして、よくも神の掟をないがしろにしたものである」（9節）。君たちは神様、神様といっているけれども、神様はそんなことは言っていないよ、ということです。神様の言葉は、愛であり、解放であり、自由だよ。君たちの言葉は、怒りでいっぱい、窮屈で、不自由だよ、とイエス

様はおっしゃりたかったのでしょうか。これを聞いて、ファリサイ派の人たちはますます怒ったでしょうね。しかし、その怒りこそ、神の愛から離れた姿をいよいよはっきり写し出していたのではないのでしょうか。

私たちも自分を振り返ってみる必要があります。互いを喜び、祝福するために私たちは命を与えられています。ですから、私は絶対に正しいと自分を絶対化させ、怒りに満ちている時、もしかすると神様から遠く離れていることがあるかもしれません。神の愛のもとに戻っておいで、とイエス様は言いたかったのではないかと思います。毎日の生活の中で、常に神様の愛を求め、神様の愛に生きることができるよう祈りましょう。

お祈りします。

神様、いつしか神様の頃の思いを忘れてしまう私たちです。神様のみ心に戻り、そこから今を捉え直すことができますように。何をするにあってもあなたの愛を原点とすることができますように。主イエス・キリストのみ名によってお祈りします。

2021年10月2日 女子聖学院放送礼拝